

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25360016

研究課題名(和文)文化資源としての手工芸 東南アジア大陸部のプラント・マテリアルをめぐる実態と展望

研究課題名(英文) Handicrafts making with plant materials in mainland Southeast Asia: Current conditions and future perspectives as cultural resources

研究代表者

落合 雪野(Ochiai, Yukino)

龍谷大学・農学部・教授

研究者番号：50347077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東南アジア大陸部の手工芸のうち、タイ系諸民族やその他の民族集団によって、植物素材から作られるモノ[プラント・マテリアル]をとりあげ、地域の生態環境や社会関係、製作者の生活実践、商品としての需要と流通の4点に着目しながら、その製作実態を分析した。

その結果、人びとが世帯やコミュニティの生活実践に即しつつ、織布や漆器の製作や使用を続けてきた実態が明らかになった。だが、同時に代替素材や模造品の流入、あるいは商品としての価値づけが進行しており、それとともに、製作のあり方や製作にともなう社会関係が変化していること、その動きの中で文化資源としての価値づけが進行しつつあることが指摘できる。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we focused on the handicrafts which have been made with plant materials by Tai and other ethnic groups in mainland Southeast Asia. Based on the field researches on textiles and lacquer wear making in northern Laos, Eastern Myanmar, and northern Thailand, we could make clear the detailed process from the materials to the products, their ecological and social backgrounds, and relation to the everyday life of the makers and the users.

The locals have continued the practices within the households and/or communities according to their own purposes of uses. However, the process and social relationships related to handicraft making has been changing, in response to recent development of market economy and re-evaluation as a commodity in the international markets. Moreover, a new movement that some communities and workshops evaluated the handicrafts as cultural resources was seen in reflecting this movement.

研究分野：東南アジア研究

キーワード：東南アジア大陸部 タイ系諸族 移住史 物質文化 生態資源

## 1. 研究開始当初の背景

東南アジア大陸部の伝統的手工芸に関する研究は、文化財や美術品としての見地から行われてきた。染織については、民族集団ごとに特徴ある素材やデザインが報告され (Howard 2007, Dell and Dudley 2003, Fraser and Fraser 2005)、収集や展示が Victoria and Albert Museum (イギリス)、Pitt Rivers Museum (アメリカ)、Jim Thompson Art Center (タイ)、国立民族学博物館 (日本) などによって実施されてきた。漆芸については、上座仏教の儀礼やベテル・チューイングのための道具を対象に研究が行われてきた (Conway 2006, Reichart and Philipen 1996)。

いっぽう商品や生活道具としての手工芸品は、その作り方や使い方が変化しつつある動的な存在である。1990年代以降の観光開発にともない、タイでは土産物としての手工芸生産が拡大するが (Cohen 2000)、社会構造の変化や市場経済の導入によって、離職者が出たり、安価な工業製品が出回ったりしたため、地域住民による手工芸品への需要は低下することとなった。このような現状において、日本では、伝統染織に関する研究 (内海 2009, 行松 2009) や支援 (森本 2008, 木村ら 2008)、「漆サミット」による研究者間交流がそれぞれ行われている。

## 2. 研究の目的

本研究では、東南アジア大陸部の手工芸のうち植物素材に由来して作られるモノ [プラント・マテリアル] をとりあげ、1) 地域の生態環境、2) 地域の社会関係、3) 製作者の生活実践、4) 商品としての需要と流通に着目しながら、その製作の実態を分析する。これをもとに、地域の文化資源としての手工芸の特性を明らかにするとともに、その将来的な存続や活用のための諸条件を提示することを目指す。

## 3. 研究の方法

ラオス北部 (ルアンパバーン県など)、ミャンマー東部 (シャン州)、タイ国北部 (チェンマイ県など) のタイ系諸族による植物素材を利用した手工芸品として、織布と漆器を対象にとりあげ、製作プロセスに関する実証的なデータや資料を集積する。

織布製作に関しては、ワタとリュウキュウアイに着目し、生育中の植物から糸を経て布に至る全工程を把握する。漆器製作に関しては、タケ工芸の延長上にある技術としてとらえ、ミャンマーのシャン州地域からラーンナー地域への技術移転の歴史を視野に入れながら、タケとウルシという植物を利用した工芸の実態を記録する。

## 4. 研究成果

### [織布調査]

織布に関する研究では、繊維植物のワタと綿布について、ラオス、ルアンパバーン県のタイ・ダム人およびタイ・ルー人集落、ラオス、ルアンナムター県のランテン人集落、ミャンマー、シャン州のエン人集落、マンダレー管区のビルマ人集落、タイ、チェンマイ県のタイ・ユアン人集落で、それぞれ現地調査を実施し、情報や資料を収集した。また、クズなどの野生植物の繊維を素材にした織布や編み物について、ラオス、ウドムサイ県およびポンサーリー県のカム人集落、ルアンナムター県のアカ人集落、ミャンマー、シャン州のアク人集落で、それぞれ現地調査を実施し、情報や資料を収集した。なお、一連の現地調査では、ラオス国立大学社会科学部 (ヴィエンチャン)、Traditional Arts and Ethnology Centre (ルアンパバーン)、クインシリキット植物園 (チェンマイ) の協力、支援をいただいた。

その結果、ワタについては、稲作を主体とする農業全体の中に、ワタ栽培の実践が布置されていること、さらに、糸紡ぎや手織りの技術、染料植物であるリュウキュウアイやキアイを使用した藍染の技術、専用の道具類の供給体制などが、密接に関連付けられながら、継承されている実態を明らかにすることができた。

いっぽうクズなどの野生植物の繊維利用については、焼畑を主体とする生業活動全体の中に、クズの採集が位置付けられており、その生育環境が焼畑休閑地の植生遷移のなかで把握されていること、さらに、繊維を精製する技術、糸を績む技術、腰機を使用した織りの技術、あるいは編棒を使用した編みの技術が、製品であるバッグの社会的価値とともに継承されている実態を明らかにすることができた。

### [漆器調査]

漆器に関する研究では、現代タイ語の漆器の語 (khruang Khun) と関係づけられるミャンマー・シャン州東部のチェントウン、タイ国北部チェンマイ市、ラオス・ルアンパバーンにおいて重点的な現地調査を実施、またビルマ漆器の中心地であるバガンの状況も把握した。

重点調査各地の漆器製作工房ないし漆器製作者に関しては、ヤンゴン在住のビルマ漆器研究家 Tan Htun 氏、チェンマイ大学芸術学部 Withi 氏、ルアンパバーン手工芸協会 Kaewmonthi 氏らと情報交換しつつ、チェントウンのウームリンタ工房、チェンマイのナンターラーム寺地区、ルアンパバーン王族の伝統漆芸継承者等を訪ねて参与観察、インタビューを行った。その結果、以下のような実態を把握することができた。

調査各地の漆芸は意匠やデザインにそれ

ぞれ特徴があるが、いずれもタケを捲くか編むかした竹器を胎に用い、周辺からタケないし竹器を調達している。ウルシ樹液はチェントウンではシャン州南部から、タイとラオスの製作者も主としてミャンマーから入手している。ラオスでは一部でタイの商品も用いられているが、山間部に産する原材料の供給は専ら人的ネットワークに依拠しており、小規模ながらも、この地域に根付いた漆芸を支えていることがわかった。

#### [結果の総括]

本研究では、東南アジア大陸部のタイ系諸族やその他の民族集団の人びとが、植物素材を利用して、生活必需品として手工芸品を製作し、利用している実態を把握することができた。例えば、綿布は、普段着や仕事着の素材として、クズ繊維は、結婚に際しての贈答品や身だしなみを整えるための持ち物として、漆器は、僧や僧院に金品を喜捨するための道具として、それぞれに固有の役割がある。つまり、世帯やコミュニティの生活実践に対応しながら、手工芸品の製作や使用が続けられてきたのである。

だが、調査地域の市場では、製作のために必要な素材の代替品（例、クズ繊維のかわりに合成繊維、ウルシ樹液のかわりに合成塗料）が出回ったり、製品そのものの模造品が安価に売買されたりしており、手工芸品の製作のあり方や、製作をとおして構築された社会関係が変化をとげつつあることが指摘できる。

そのいっぽう、世界的な自然素材や手仕事への再評価の動き、あるいは調査地域でのツーリズムの展開を背景に、手工芸品が商品として注目され、世帯やコミュニティの外へ、とりわけ海外の市場へ流通していく事実も確認できた。とくに染織製品に関しては、ラオスやタイ国などでは、住民組織や工房などによって、動態保存を意識した商品の製作や販売だけでなく、製造工程の公開、体験型ワークショップや製作地訪問ツアーの開催などを実施する活動が目立ちつつある。つまり、作られたモノそのものだけでなく、作られるプロセスや作り手や使い手の生活のありさまを含めて、手工芸品が文化資源として把握され、評価されつつあるのである。

このような動きは、植物素材を利用して手工芸品を製作する一連のしくみを、地域で継承することに繋がっていくのだろうか。今後とも、さらなる調査が必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計 1 件)

Yukino OCHIAI and Tara Gujadhur,

Job's tears: A natural bead in textiles of mainland Southeast Asia, *Textile Asia*, volume 8, issue 2, 2016 (In printing) (査読無)

#### [学会発表](計 2 件)

落合雪野、農業と染織-植物から糸へ、糸から布へ-、関西農業史研究会第 345 回例会、2015 年 12 月 12 日、大阪経済大学、大阪府

落合雪野、山野を食べる-東南アジア大陸部ラオスの『在来農法』、2015 年度味の素食の文化フォーラム、2015 年 9 月 26 日、味の素食の文化センター、東京都

#### [図書](計 5 件)

落合雪野・白川千尋編著『ものづくりの植物誌-東南アジア大陸部から』臨川書店、2014 年、334 頁

落合雪野、プラント・マテリアルへの視点、落合雪野・白川千尋編著『ものづくりの植物誌-東南アジア大陸部から』臨川書店、2014 年、pp.5-19.

落合雪野、ジュズダマ→手工芸品：種子からパーツへ、落合雪野・白川千尋編著『ものづくりの植物誌-東南アジア大陸部から』臨川書店、2014 年、pp.73-91.

飯島明子、マイ・ヒア→捲き竹細工：竹林と結ばれる工房、落合雪野・白川千尋編著『ものづくりの植物誌-東南アジア大陸部から』臨川書店、2014 年、pp.230-248.

落合雪野編著『国境と少数民族』めこん、2014 年、237 頁

#### [産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

落合 雪野 ( OCHIAI, Yukino )  
龍谷大学・農学部・教授  
研究者番号：50347077

### (2)研究分担者

飯島 明子 ( IIJIMA, Akiko )  
天理大学・国際学部・教授  
研究者番号：70299155